

祭礼図像中に組みこまれた福音書記者肖像について

瀧口美香

はじめに

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書記者肖像は、四福音書写本⁽¹⁾または典礼用福音書抄本⁽²⁾の挿絵として、写本中にしばしば描かれる主題の一つである。多くの場合、記者の肖像は見開きの左頁におかれ、右頁から始まる各福音書冒頭のテキストと向き合う形で配置される。福音書記者は単独で、室内で書見台を前に座り、筆記している姿で描かれることが多い。このような典型的福音書記者肖像は、当然のことながら「福音書を著す」という記者の役割を強調する。

福音書記者肖像に関する先行研究の筆頭にあげるべきものといえば、一九二〇年代に出されたフレンドによる研究である⁽³⁾。彼は膨大な福音書記者肖像の作例を収集し、分類を行った。フレンドの分類による記者像の諸タイプは、福音書記者肖像に関する体系的・古典的研究として以降たびたび引用され、一九七〇年代にプリンストンで行われたビザンティン写本の展覧会カタログ解説にも踏襲されている⁽⁴⁾。一方、フレンドの分類とは別の視点から福音書記者肖像の研究に取り組んだものに、スパタラキスの研究がある⁽⁵⁾。スパタラキスは「左ききの福音書記者」という特殊なタイプの作例を収集し、比較検討している。この他、これまでに出版されたことがない未公開の写本紹介にもなっており、福音書記者肖像がはじめて公開・記述されるというケースも見られるが⁽⁶⁾、室内に座る記者の肖像にはそれほど大きなヴァリエーションは見られず、刺激的な研究になりにくいように思われる。

本稿では、書見台を前に筆記するタイプとは異なる福音書記者を描いた、二つの写本挿絵を紹介する。いずれも、福音書記者が祭礼図像中に組みこまれるという点において、通常の福音書記者肖像とは異なっている。ここでは、特殊な記者像を作り出した制作者の意図を解釈することを試みたい。

1. ロンドン大英図書館 Or. 3372

第一の作例は、大英図書館所蔵のシリア語典礼用福音書抄本で、制作年代は十二世紀または十三世紀とされる⁽⁷⁾。全 142 フォリオ、縦 34 センチ×横 22 センチの大型写本である。

写本冒頭見開きの二フォリアに「キリストの降誕」「洗礼」「エルサレム入城」の三場面が配され、最後の場面に四人の福音書記者がそろって描かれる (fols. 4v-5r, 図 1、図 2)。各福音書記者はそれぞれ十字架のついた福音書を手に、左からマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの順で、正面向きに座っている。この他、八つの祭日の朗読箇所が装飾文によって飾られるとともに、「昇天」の朗読箇所に先立って金の十字架が描かれる (fol. 96v)。つまり、キリストの生涯を描く連続説話場面は、冒頭の二フォリアに限定されている。それではなぜ、キリストの生涯の中からこの三場面が選ばれ、福音書記者が組み合わせられたのか。写本冒頭見開きの挿絵中で、福音書記者はどのような役割を果たしているのだろうか。

「降誕」「洗礼」「入城」の三場面に共通することは、キリストがある場所からどこか別の場所に「入っていく」ことを示している点であるように思われる。第一に、「降誕」はキリストがこの世に生まれたこと、いいかえるなら天上の世界から地上へとやってきたことを示している。また「洗礼」では水の中に「入り」、ここからキリストは公生涯に入る。さらに「エルサレム入城」では都の門を「入り」、同時にそれは受難への入口となっている。キリストの生涯の中から場面選択を行うにあたり、最後の場面として「磔刑」ではなく「入城」が選ばれたのは、「入る」という仕業に強調点がおかれたためであると推測される。ただし「降誕」に対して「地上に入る」という表現が妥当であるかという疑問、それを洗礼の水に入る時の「入る」と同列に扱うことができるかという疑問もありうるだろう。とはいえ、地上における生涯の出発点である「降誕」、公生涯に入る「洗礼」、受難に入る「入城」が、キリストの生涯における三つの区切りを表し、そこから新たな局面に入っていくことは確かである。

「降誕」「洗礼」「入城」は、奉神礼(リトゥルギア)の三部構成に対応している。リトゥルギアは「奉献礼儀」「ことばの式」「信者の聖体礼儀」の三部により構成され、それぞれの部分がキリストの生涯の各時期に対応するものと解釈

される⁽⁸⁾。第一に降誕から洗礼まで、第二に洗礼後の伝道期間、第三に受難と死と復活である。特に第三部の始まりを示す大聖入では、イコノスタシスの北門からナオスへ出て、中央の王門から再びベーマへと入る典礼行進が執り行われ、これは「エルサレム入城」を象徴的に表すものと解釈される⁽⁹⁾。つまり、写本中に選ばれた三場面は典礼の構成と対応しているといえる。

四人の福音書記者は「エルサレム入城」の真下にそろって正面向きに描かれ、あたかもエルサレムの門を通り抜けてやってくるキリストを待ち構えているかのようである。福音書記者肖像はあくまで独立した肖像であって、説話場面との関連はないという異論があるかもしれない。ここでは、連続する四コマの一環に配されていることから、説話場面の自然な流れの中に位置づけて解釈することが可能であるように思われる。このような位置に配された福音書記者は、キリストの生涯のはじめからとおして見渡しているといえるかもしれない。

ろばの上に座るキリストは、書物をその腕に抱えている。エルサレム入城の時点で福音書はまだ書かれていないために、この表現は奇妙に思われる。キリストの手にする書物は、下段で福音書記者が抱える福音書によって繰り返される。「降誕」場面では、二人の天使、聖母、ヨセフの四人が飼い葉桶のキリストをぐるりと取り囲んでいる。「洗礼」では、三人の天使と洗礼者ヨハネの四人がキリストを囲み、水から上がるキリストは天使たちによって迎えらる。同様に、エルサレムの門を通り抜けたキリストは、四人の福音書記者たちによって迎えらるかのような視覚効果が、ここに作り出されている。エルサレム入城でキリストを迎える人々は門前に描かれているため、キリストを迎えるのは福音書記者ではない、という反論に対しては、上下二場面を区切るアーケードに注目することによって答えたい。都の門の上に取り付けられたアーチの意匠が、福音書記者の頭上でも繰り返され、彼らが座る場所と都の門との連続が示唆されているからである。キリストが手にする書物には彼の生涯が凝縮され、それが福音書記者たちの手に引き渡される。ここでは、福音書記者が筆記する動作は描かれない。「降誕」や「洗礼」でキリストを取り囲み、キリストを迎え入れた者たちの役割を、福音書記者が最後にもう一度繰り返しているのである。

各場面は伝統的なイコノグラフィから大きく逸脱するものとはいえない。しかしながら、三つの説話場面の終わりに福音書記者を組みこむことによって、室内で筆記する従来の肖像によっては伝えられない福音書記者の特別の役割、

すなわち「キリストの生涯を受け止める者たち」という役割が視覚化されているように思われる。

2. エルサレムのアルメニア正教総主教座 Cod. 251

福音書記者肖像が祭礼図像中に組みこまれる第二の例は、エルサレムのアルメニア正教総主教座所蔵の福音書写本である。写本は、一二六〇年 T'oros Roslin により制作された⁽¹⁰⁾。写本冒頭にエウセビウスの手紙、対観表、奉献銘文が記される (fols. 3v-14)。また、各福音書冒頭に記者の肖像が挿入されるが、マタイだけが「マギの礼拝」を描く説話場面と組み合わせられ (fol. 15v, 図3)、他の三人の福音書記者像は、単独で室内に座って筆記する一般的なパターンにしたがって描かれる⁽¹¹⁾。福音書記者が祭礼図像と組み合わせられる例は他の写本にも見られ、「マギの礼拝」を含む「キリスト降誕」の場面がマタイと結びつけられること自体はそれほど珍しいことではない⁽¹²⁾。しかしながら、ここではなぜマタイだけが説話場面と組み合わせられることになったのだろうか⁽¹³⁾。

全頁大の挿絵は上下二段に分けられているが、画面のほぼ五分の四が上段に割り当てられている。上段では、「キリスト降誕」の洞窟と飼い葉桶を背景に聖母子が座し、捧げ物を手にした三人のマギが腰をかがめて近寄っている。その後ろには、キリストを礼拝するために訪れた人々の列が続いている。左上方には、羊飼いへのお告げが描かれ、下段右手には「キリストの産湯」が描かれる。一見「キリスト降誕」の要素が多く含まれているように見えるが、キリストは飼い葉桶の中に横たわる姿ではなく、「マギの礼拝」の主題の方に重点が置かれている⁽¹⁴⁾。

画面中で奇異に感じられるのは、下段左端に挿入された福音書記者の肖像である。「マギの礼拝」と組み合わせられ、「キリストの産湯」と並列におかれる福音書記者は他に類例がない。画家は、「マギの礼拝」に福音書記者肖像を挿入するにあたり、その存在が他の登場人物から浮いてしまわないようにある工夫をしている。ヨセフは、上段左端に描かれているが(図3)他の降誕場面ではしばしば画面下のはじめに背を丸めて座る姿で描かれる(図4)。ここでは、本来ヨセフが配置されるべき位置に福音書記者をおくことによって、あたかもそれを降誕図の一部であるかのように扱っているのである。

福音書記者をひとつの基点とする三角形の構図の中に、幼子キリストが二度繰り返されている。聖母のひざの上のキリスト、そして助産婦のひざに抱えられたキリストである。似たような動作で、福音書記者はひざの上に巻物を広げている。ここでは三角形の構図中に、キリストの三つの異なる側面が、三つの異なる形態によって暗示されているように思われる。第一に、暗い洞窟を背景に光輝く金のニブスとともに描かれる中央のキリストは、世の光としてのキリストを表すように思われる。キリスト自身「わたしは光として世に来た」と述べているからである（ヨハネ第十二章四十六節）。第二に、助産婦に抱えられた裸の幼子は、受肉したキリスト、肉体を持つ人としてのキリストと見ることができだろう。ヨハネによる福音書は、初め神と共にあったことばが、肉となったと語っている（ヨハネ第一章一 十四節）。第三に、福音書記者が巻物に書き記すことばは、ロゴス（ことば）としてのキリストに対応している。キリストとともに描かれる聖母と助産婦に対して、福音書記者を同列と見なすことがはたして妥当か、という異論もありうる。彼はキリストを抱いているわけではないからである。しかし、記者像が上段場面と何の関連もないとは考えにくい。したがって、似たような動作の繰り返しの中に、意味の連関が示唆されているものと解釈した。

さらに、このキリストの三要素はマギのささげる三つの贈り物⁽¹⁵⁾、黄金、没薬、乳香（マタイ第二章十一節）と対応している。黄金の捧げ物は光としてのキリストに対応する。没薬の捧げ物は受肉した人としての肉体を持つキリストと結びつけられるように思われる。なぜなら、福音書に記されているとおり、ユダヤ人の埋葬の習慣では遺体に没薬をそえるからある（ヨハネ第十九章四十節）。二世紀のリヨンの司教イレナエウスは、マギの捧げ物である没薬は死を暗示するものであると述べている⁽¹⁶⁾。最後に、乳香はキリストのことばとしての側面と関連づけられるように思われる。コンスタンティノポリスの総主教ゲルマノスはその著作「奉神礼について」の中で、典礼で乳香がたかれ、特にアレルヤが唱えられるとき、祭壇におかれた福音書（すなわちキリストのことば）の上に香の煙がふりかけられる、と述べているからである⁽¹⁷⁾。

キリストの三要素とマギの捧げ物をあえて対応させる必然性があるのか、という問いに対しては、福音書記者マタイが「降誕」というよりは「マギの礼拝」に重点がおかれた場面と組み合わせられたことを指摘したい。そのため、本挿絵

でマギの担う役割について、他の要素とのつながりの中で解釈する必要があると考えられる。挿絵は、光・ことば・肉というキリストの三つの側面を示すとともに、それらをマギの捧げ物と結びつけることによって強調していると解釈できるだろう。

ナジアンゾスのグリゴリオスは、キリストの形容として「捧げ物」という語をあげている⁽¹⁸⁾。次いでキリストの呼び名を以下のように列挙している。第一に「『御言葉』と呼ばれるのは、言葉が精神に対するような関係が子が父に対して有しているからである」。第二に「『光』と呼ばれるのは、言葉と生活において浄められた魂の輝きであるから」である。第三に「『人間』と呼ばれるのは、罪以外はわれわれと同じ肉体」になったからである⁽¹⁹⁾。つまり、ことば・光・肉はグリゴリオスによるキリストの定義に基づくものでもある。

「降誕」の祭日に典礼でマタイ冒頭のテキストが朗読されることから、「降誕」は従来マタイとの結びつきが強い。そのため、「降誕」の洞窟を背景とする「マギの礼拝」は、他の三人の福音書記者ではなく、マタイと組み合わされたと考えられる。さらに、写本冒頭に位置するマタイだけが「マギの礼拝」と組み合わされているため、本挿絵は写本全体の巻頭挿絵となっているように思われる。他の三人の福音書記者は説話場面と組み合わされない単独像であり、マタイだけが四人の中で突出してバランスを欠いているように見えるが、写本全体の巻頭挿絵と見なせば、それほど不自然ではない。また、一見伝統的なイコノグラフィにしたがうものであるように見えるが、挿絵は「マギの礼拝」を不自然な形で二分割し、福音書記者肖像を加えることによって、そこに福音書の中核となるべきメッセージ、すなわちキリストはことばであり、受肉した人であり、光であるというメッセージを凝縮し視覚化しているといえる。

おわりに

本稿では、福音書写本一般に多く見られる福音書記者肖像とは異なる記者像に注目した。単独で室内で座って筆記する従来のタイプをはずれ、祭礼図像中に組みこまれた記者像をとりあげ、各々の場面において、福音書記者がどのような役割をになうものとして描かれているか、という点を検討した。

その結果、室内で筆記する従来の肖像によっては伝えられない福音書記者の特別の役割が視覚化されていることが明らかになった。

今後、同時代のシリア語写本挿絵、アルメニア語写本挿絵との比較を行い、このような挿絵が生み出された背景を探ることによって、本稿で紹介した福音書記者像の位置づけを、東方キリスト教会における福音書写本制作という大きな流れの中で、さらに考察していきたい。

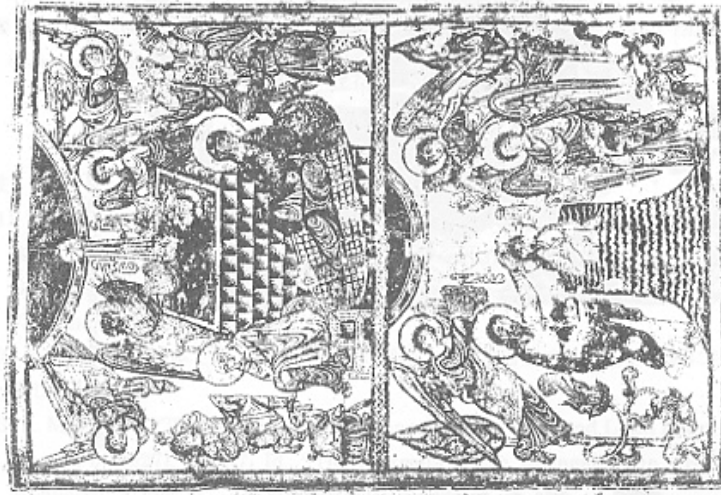


図1 London, British Library, Or. 3372, fol. 4v: 降誕、洗礼

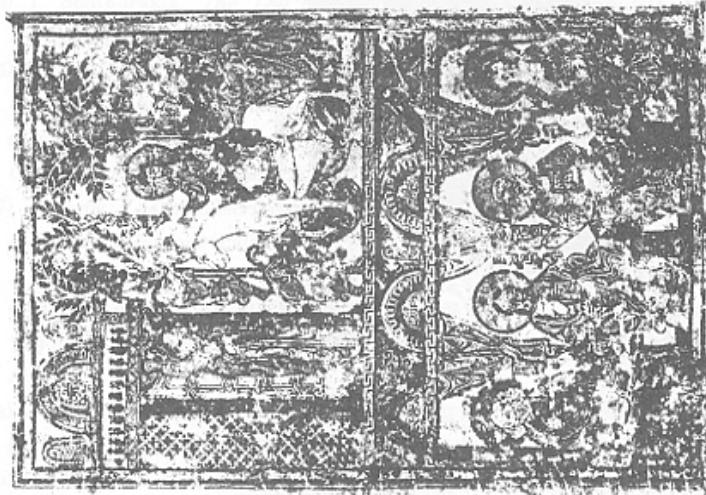


図2 London, British Library, Or. 3372, fol. 5r: エルサレム入城、四福音書記者



図4 Baltimore, Walters Art Gallery, ms. W. 539, fol. 208v: 降誕



図3 Jerusalem, Armenian Patriarchate, cod. 251, fol. 15v: マギの礼拝、福音書記者マタイ

図版出典

- 図 1, 2: J. Leroy, *Les manuscrits syriaques à peintures conservés dans les bibliothèques d'Europe et d'Orient* (Paris, 1964).
- 図 3: S. Der Nersessian, *Miniature Painting in the Armenian Kingdom of Cilicia from the Twelfth to the Fourteenth Century* (Washington, D. C., 1993).
- 図 4: T. Mathews, *The Art of Byzantium: Between Antiquity and the Renaissance* (London, 1998).

注

- (1) マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネによる四福音書写本は、ビザンティン社会における写本制作の中で、主要な位置を占めるものであった。現存する写本数は、新約聖書写本よりもはるかに多い。K. Aland, *Kurzgefaßte Liste der griechischen Handschriften des Neuen Testaments* (Berlin, New York, 1994²).
- (2) 典礼用福音書抄本とは、典礼において朗読される福音書の章句を教会暦にしたがって編纂したもの。
- (3) A. M. Friend, "The Portraits of the Evangelists in Greek and Latin Manuscripts," *Art Studies* 5 (1927), 115-47; Id., "The Portraits of the Evangelists in Greek and Latin Manuscripts. Part II," *Art Studies* 7 (1929), 3-29.
- (4) G. Vikan, ed., *Illuminated Greek Manuscripts from American Collections* (Princeton, 1973).
- (5) I. Spatharakis, *The Left-Handed Evangelist. A Contribution to Palaeologan Iconography* (London, 1988).
- (6) e. g. A. Cutler, "A Palaeologan Evangelistary in the Gennadius Library," *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik* 24 (1975), 257-63; J. Prolović, "Die Miniaturen des sogenannten Dovolja-Tetraevangelians (Belgrad, NBS, RS. 638)," *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik* 45 (1995), 283-306.
- (7) J. Leroy, *Les manuscrits syriaques à peintures conservés dans les bibliothèques d'Europe et d'Orient* (Paris, 1964), 261-67. Leroy は各国図書館に所蔵されるシリア語写本のカタログ化を行い、各写本を詳細に記述しているが、本挿絵の場面選択と福音書記者の組み合わせに対する解釈には触れていない。銘文により、修道士インマヌエルによって書写されたものであることが知られているが、銘文中に制作地と制作年代に関する記述はない。
- (8) 一瀬英昭「ニコラオス・カバシラス聖体礼儀註解解説」上智大学中世思想研究所編訳監修『中世思想原典集成三 後期ギリシア教父・ビザンティン思想』（平凡社 1992）, 901.
- (9) PG150, 420;ニコラオス・カバシラス「聖体礼儀註解」一瀬英昭訳、前掲『中世思想原典集成三』, 901.

- (10) S. Der Nersessian, *Miniature Painting in the Armenian Kingdom of Cilicia from the Twelfth to the Fourteenth Century* (Washington, D. C., 1993), 52, fig. 212. Toros Roslin は十三世紀第三四半期に活躍した写字生 / 画家で、1256年から1268年の間に制作された七写本に彼のサインが残されている。Der Nersessian の関心は、類似作例との比較にあり、福音書記者肖像とキリスト伝挿絵の組み合わせに対する考察はなされていない。
- (11) 「マギの礼拝」以外に 15 の説話場面が散在するが、いずれも余白に描かれるもので、福音書記者肖像と組み合わせられる全頁挿絵とは異なっている。
- (12) 祭礼図像と福音書記者肖像の組み合わせについては、J. Lowden による以下の項目を参照。J. Turner, ed., *The Dictionary of Art*, vol. 9 (New York, 1996), 608-10, s. v. <Early Christian and Byzantine Art, Greek Manuscripts>. また、研究論文に C. Meredith, "The Illustration of Codex Ebnerianus: A Study in Liturgical Illustration of the Comnenian Period," *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 29 (1966), 419-24 がある。
- (13) 特殊な図像が形成される契機とその過程について考察する例に、S. Dufrenne, "À propos de la naissance de David dans le Ms. 3 de Dumbarton Oaks," *Travaux et Mémoires* 8 (1981), 125-34 がある。本論文は「ダビデ誕生」の図像に描かれた三人の女官と彼女たちが手にする捧げ物について検討している。Dufrenne は、特殊な図像や定型からの逸脱は突然変異のごとく生じるものではなく、また何の土台もないところから生じるものでもないという前提に立ち、比較作例を提示することによって図像形成の過程を裏付ける方法を取っている。一方、福音書記者と組み合わせられた「マギの礼拝」挿絵については、Meredith がカタログ化した写本群（注 12 参照）と比較できるかもしれない。ところが、「降誕」ではなく「マギの礼拝」が選択されている点、画面が不自然な形に二分割される点において、本写本は Meredith 写本グループとの比較の内におさまらない、特異な例であるといえる。そこで本稿では、類似作例との比較による方法ではなく、むしろ挿絵の独自性と制作者の意図の解読に焦点を当てる方法を試みた。
- (14) 本来別々の独立した場面として描かれていた「降誕」と「マギの礼拝」がひとつの場面として表されるようになる過程については、Lafontaine-Dosogne が検討している。J. Lafontaine-Dosogne, "The Iconography of the Cycle of the Infancy of Christ," in P. A. Underwood, ed., *The Kariye Djami IV. Studies in the Art of the Kariye Djami* (Princeton, 1975), 220-22.
- (15) マギの三つの贈り物の予型は、旧約の記述中に見られる。神はモーセに没薬と乳香を材料として聖別の油と聖なる香を作るよう命じている（出エジプト記第三十章二十二 三十八節）。黄金は契約の櫃を作る材料に用いられる（同第二十五章十 十六節）。またイザヤはシェバの人々が主のもとに黄金と乳香を携えて来ることを預言している（イザヤ第六十章六節）。
- (16) PG 7 (1), 870; A. Rousseau et L. Doutreleau, tr., *Irénée de Lyon, Contre les hérésies*

III, Sources chrétiennes 211 (Paris,1974), 107.

(17) P. Meyendorff, tr., *St Germanus of Constantinople, on the Divine Liturgy* (New York, 1984), 20.

(18) PG 36, 125; P. Gallay, *Grégoire de Nazianze. Discours 27-31*. Sources chrétiennes 250 (Paris, 1978), 261.

(19) PG 36, 130; Gallay, *Grégoire de Nazianze. Discours 27-31*, 269-75.